

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Quad-Deck platform design points to harvest savings
オーストラリア

4層式プラットフォームで牧草刈取作業の省力化を



最近発表されたデュラス4層式ハーベスタプラットフォーム（ヘッダー）により、牧草の刈取りとウインドローが1台で可能になった。豪州ニューサウスウェールズ州ガナダで開かれた農業機械展AG（AG）で、ミッドウエスト・ファブリケーション社が発表した。このヘッダーを用いれば、刈取りとウインドローの2つの作業に複数の機械を組み合わせて使用する必要がなくなるといわれる。

同社はクイーンズランド州に拠点を置くメーカーで、新製品は世界で初めて牧草刈取りとウインドローの両方を行なえるため、刈取作業を根本から変えることになる自信をのぞかせる。同機は2010年当初、重くかさばる牧草の上をウインドロートラクタが跨るよう開発したが、4層構造により刈取後の草を機械の下ではなく横に置いていくことでこの問題を解決。ハーベスタは2列の間をスムーズに移動できる。

同社のラインナップに新たに加わった新製品は12・5mと15・24mのプラットフォームで、一度に7・6m幅に2列のウインドローをつくるユニット。これを可能にするのが4層構造だ。作物分離用の3枚の垂直刃オブションが付いた4層のベルトコンベアが動く。GPSや自動操舵を使用した農業にも適している。

同社によれば、農家やコントラクターにとってコンバインを生産性のより高いハーベスタ・ウインドロー動力装置に替えることは、資本的支出を削減することにつながるという。

12年のキャンペーンの一環で新たに発表されたクワップホーク・デュラスが現在の同社のクワップホーク・ドレーパープラットフォームに取って代わることになりそうだ。



ミッドウエスト・ファブリケーション社のサービス技術員エイドリアン・ウィルキンス氏と営業担当ティム・シュット氏。新製品、Durus Quad-Deck 50の前で。

Fastrac lands in KwaZulu-Natal Midlands
南アフリカ

クワズール・ナタール州ミッドランズにファストラックが上陸



南アフリカで最も急速に成長している農機販売会社の一つグリーンフィールズ・アグリカルチュラル社は最近、JCBファストラックを自身のトラクタ・作業機部門に加えた。

クワズール・ナタール州ミッドランズのムーイ・リバーに位置する、歴史のある同社圃場でイベントを行なった。JCBトラクタの発売を発表し、テレハンドラーや不整地フォークリフト、ホイールローダ、スキッドステアローダ、ワークマックス・ユーティリティビークルなど同社農機カタログ掲載製品を展示した。

黄色いJCBトラクタが紹介された背景には、地場市場では多くのトラクタが用いられているが、特に林業やサトウキビ産業では、大幅に改造されて牽引用として使われているものもある。販売会社はこれらの分野をターゲットとして高速JCBファストラックキャリアを売り込みたいと考えた。他の利用法についても試験が予定されている。例えばトウモロコシ栽培地域での穀粒の運搬などは、コンバインのような大型機械で毎時何十もの穀物を刈ることを考えれば、圃場内や路上運搬中のハンドリングにも異なるアプローチが必要である。

現在、同国で入手可能な作業機の中でも高い能力を持っているので、通常の耕作作業を行なうだけでなく、同機の性能は堆肥や肥料、薬剤の散布などにますます活かされるであろう。



南アフリカで将来のディーラー、顧客候補が英国製トラクタを視察した。

JCBファストラックはアフリカ大陸のその他の地域ですでに重宝されている。特にマラウイでは、長年相当な数の同機が稼働しており、サトウキビを運搬している。



Easing the materials handling workload

米国



スキッドステアローダーは米国農家に人気がある。掘る、押す、ならすなど作業もこなせる汎用機だ。写真の9馬力エンジンのボブキャットS770は最大揚力1.5tで、垂直に3.35m持ち上げることができる。

アイオワの最も肥沃な土壌環境下で、現在飼育しているのは数千羽の七面鳥だ。飼育舎は幅18〜23mで場所によって変わり、中には長さ150mの大規模なものもある。「我われのボブキャットローダーは、飼育舎の清掃、堆肥散布、除雪など七面鳥飼育のあらゆる場面に使っている」とジャンス氏は話す。

現在、農場で使用しているのはMシリーズS750。通常の農業用バケットの他に、アングルブルーム（角度のついたブラシロール）とロックバケット（先端にギザギザのついた岩石用バケット）を同機に取り付けて飼育舎の清掃をする。「ロックバケットで敷わらの表面をすくい取って飼育舎外に押し出す」と彼は説明した。その間にもアングルブルームの毛がゴミや残骸を取り除いてきれいな表面に仕上げる。ピッチフォークよりもずっといいと氏は満足している。

運搬作業の負担を軽減



北米の農家に尋ねてみるといい。特にピッチフォークやピッチシヨベルを使用した経験があり、スキッドステアローダーの価値を実感しているベテラン農家はこう答えるだろう。この機械が定着する以前はどのようにしていたか想像できないと。

例えばアイオワ州中部育ちのデル・ジャンス氏。父親は1950年代に就農し、彼が父親と働き始めたのは70年代である。現在は息子のケビンが故郷に戻り、3代目として農業で生きていこうとしている。

アイオワの最も肥沃な土壌環境下で、現在飼育しているのは数千羽の七面鳥だ。飼育舎は幅18〜23mで場所によって変わり、中には長さ150mの大規模なものもある。「我われのボブキャットローダーは、飼育舎の清掃、堆肥散布、除雪など七面鳥飼育のあらゆる場面に使っている」とジャンス氏は話す。

現在、農場で使用しているのはMシリーズS750。通常の農業用バケットの他に、アングルブルーム（角度のついたブラシロール）とロックバケット（先端にギザギザのついた岩石用バケット）を同機に取り付けて飼育舎の清掃をする。「ロックバケットで敷わらの表面をすくい取って飼育舎外に押し出す」と彼は説明した。その間にもアングルブルームの毛がゴミや残骸を取り除いてきれいな表面に仕上げる。ピッチフォークよりもずっといいと氏は満足している。

Operate a chainsaw on the quiet

オランダ

充電が切れるとこれらのチェーンソーはどうなるのか。ここでも違いがある。ドルマー社、スチール社製チェーンソーを購入する際、通常は2つめのバッテリーを一緒に購入することになっている。このため2つのバッテリーを交互に使用して作業が行なえるのだ。充電時間はそれぞれ20分、30分と短い。ペレンク社の平たいバッテリーパックの充電には8時間を要する。このため、夜間に行なうのが一般的だ。



バッテリー駆動チェーンソーなら、煙も臭いもない静かな作業が可能に。写真の製品はドルマー社製800ユーロ（約8万5000円）、スチール社製900ユーロ（約9万6000円）、ペレンク社製2000ユーロ（約21万3000円）。※編集部にて換算（1ユーロ=約106円）

静かなチェーンソー操作



バッテリー駆動のチェーンソーは男らしさに欠けるのかも知れない。豪快にとどろく音もなければ、煙も出ない。しかし、利点はある。

切れ味は40ccエンジンチェーンソーと対比できる。非常に静かな上、臭いや煙が出ないので近所迷惑になりにくい。さらに、スタートボタンを押せばすぐに作動する。エンジン故障はほとんどなく、メンテナンスも簡単だ。

農場での軽作業であればバッテリー駆動のチェーンソーの方が使い勝手がいい、と話するのはオランダ機械雑誌の編集者だ。この雑誌ではドルマー社製のAS13625、ペレンク社製のsepioc20、スチール社製のMSA160Cというバッテリー駆動のチェーンソー3機種を製品レビューを行なっている。

その結果において特記すべきはバッテリー駆動時間だ。「通常」の条件下で作業を行なった場合、ドルマー社製のバッテリーの駆動時間は30分、スチール社製は45分、ペレンク社製は120分と大きな開きがあった。この差異の決定的な理由は、ペレンク社製チェーンソーは大容量3.7kgのバッテリーを本体とは別に背負って作業するため、チェーンソー自体の重量もわずか3.1kgに抑えられている。

一方、ドルマー社、スチール社製チェーンソーのバッテリーは本体に装着するタイプであるため、予想通りにそれぞれ4.8kg、5.1kgという重量である。